

# 特定非営利活動法人鳳雛塾

## 江藤新平と佐賀戦争

### —佐賀県の偉大な歴史—

「薩摩の西郷隆盛や大久保利通がやってきたことに比べて、身内びいきかもしれないが、それに勝る大仕事を江藤は行った。江藤の成してきたことを、いまここに改めて考えるべき時代ではないかと心から思います」

(佐賀県 山口知事)

「江藤新平—日本の礎を築いた若き稀才の真に迫る—」の開会式<sup>1</sup>で、佐賀県知事山口祥義氏はこの展覧会への期待を語った。

そして2025（令和7）年、2月1日、山口知事は、江藤新平復権・島義勇顕彰式典において「江藤新平復権宣言」<sup>2</sup>に署名している。

図1 「没後150年特別展 江藤新平」チラシ  
(出所；一般社団法人 佐賀市観光協会  
Sagabai.com)

<sup>1</sup> 2024年3月15日、佐賀城本丸歴史館で開催。

<sup>2</sup> 内容の一部を参考資料 に掲載。佐賀県では、2024（令和6）年から「江藤新平復権プロジェクト」を展開している。「江藤新平—日本の礎を築いた若き稀才の真に迫る—」はその一環として開催された。（会期；2024年3月15日～5月12日）

本ケース教材は、特定非営利活動法人鳳雛塾専任講師の梁井宏幸が作成しました。このケースは、経営に関する適切あるいは不適切な処理を例示することを意図したものではありません。作成にあたっては、佐賀城本丸博物館 藤井祐介氏に資料提供、取材について多大なるご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。（2025年4月）

桜の花も終わり、日差しに夏の気配を感じる 2024（令和 6）年 4 月半ばの日曜日、ケースライターは佐賀城内にある佐賀城本丸歴史館を訪れた。江藤新平の没後 150 年を記念した特別展「江藤新平—日本の礎を築いた若き稀才の真に迫る—」を観覧するためである。

展示会場にはたくさんの方が訪れており展示されたパネル資料や映像を熱心に見入る人やボランティアの説明スタッフの説明に聴き入る人の姿が目立つ。同行の家族に展示について感慨深げに解説する年配者も多い。

佐賀に住む高校生以上の人で江藤新平の名を知らない人は少ない。多くの人は、その名を「佐賀の乱」とセットで記憶している。しかし、この展覧会では観覧者はその常識に上書きを迫られる内容を目の当たりにした。中でも最も象徴的なのは、従来「佐賀の乱」と呼ばれて来た 1874（明治 7）年 2 月起こった旧佐賀藩士と明治新政府軍の武力衝突が、「佐賀戦争」という名で表記されていたことである<sup>3</sup>。（参考資料 2 参照）

歴史記述の中では一般的な定義はないが、「乱」と「戦争」という用語は同義ではない。「乱」とは、小規模な反乱や反政府行動（一部の勢力が政府や権力に対して起こした反乱）を指しことが多く、一揆やクーデターに近いニュアンスがある<sup>4</sup>。それに対し「戦争」とは、国家や大規模勢力同士の組織的な武力衝突を指し、国内の内戦であっても規模が大きく組織的なものは「戦争」と呼ばれることがある<sup>5</sup>。

「佐賀の乱」は両軍併せて 1 万に規模の兵力が戦った大規模なもの<sup>6</sup>であり、後述するが、江藤等の挙兵は新政府軍への反乱を企図したものとは言えなかった<sup>7</sup>。

会期中 4 万人の来場者を集めて展覧会は盛況裡に終了し、これまでの佐賀の歴史に関する解釈に一石を投じた。

このケースは、幕末維新期の佐賀の歴史に再度光を当て、そこで活躍した一人の英才の生涯を振り返ることを通して、今に生きる人々に知恵と力を育むことを促すものである。

## 若き日の江藤新平

江藤新平は 1834（天保 5）年 2 月 9 日、佐賀藩下級武士の家の長男として佐賀県八戸村（現佐賀市八戸）に生まれた。幼名は恒太郎、15 歳で元服し胤雄たねおと名乗り、後に新平と改めた。号は南白なんはく。

<sup>3</sup> 佐賀市地域振興部文化財課が提供する佐賀市の歴史・文化に関する情報発信サイト「歴史・文化お宝帳」では、「佐賀の役（佐賀戦争）」と表記されている。（<https://www.saga-otakara.jp/search/detail.html?cultureId=2493>）

<sup>4</sup> 例として、平将門の乱（10 世紀）、承久の乱（1221 年）、島原の乱（1637 年）など。

<sup>5</sup> 例として、戊辰戦争（1868-1869 年）、西南戦争（1877 年）、日露戦争（1905 年）など。

<sup>6</sup> 両軍の規模には諸説があるが、政府軍 4 千人～5 千人、旧佐賀藩軍 3 千人～5 千人と見られる。（鈴木 1989 等）

<sup>7</sup> こうした事実を踏まえ、帝国書院の『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き（令和 7 年度版）』では、「佐賀の乱（佐賀戦争）」と表記された。（<https://www3.nhk.or.jp/news/saga/20240717/5080017548.html>）